仏教から見た「いのち」

小川一乗

はじめに

本日は成道会というご縁を頂きましてありがとうございます。先ほど学長先生のご挨拶にもございましたように、成道会というのは、仏教を始められましたお釈迦様がお覚りを成し遂げられたということが成道、道が成るということです。それが伝統的には十二月八日と言われております。それを記念する集いが成道会です。その成道会で「仏教からみた「いのち」」という講題で話をするようにというご指示を頂きましたので、これからしばらくの間、そのことについてお話をさせて頂きたいと思います。

「いのち」の定義

「いのち」という言葉ですけれども、仏教では「いのち」をどう見ているのでしょうか。仏教で「いのち」というのは、生まれて歳をとり、時には病気もして、死んでいくという寿命のことです。生まれてから死んでいく寿命ということを「いのち」とよんでおります。皆さんは日ごろ、「いのち」という言葉を

聞きましたらどのようなことをイメージされますか。現代において「いのち」というのは、どのような了解になっているのかと言いますと、だいたい常識的には、どの辞書を引いても四つの意味があります。一つ目は、「生きる力、生活力」という意味です。二つ目は、「生まれてから死ぬまでの寿命」という意味です。三つ目は、「人生、生涯、一生」という意味です。四つ目は、「一番大事なもの」という意味です。このような四つの意味で現代語としての「いのち」は使われています。皆さん方にとって、「いのち」は、この中のどれに当てはまりますか。

教育の場では、盛んに「いのちを大切に」と言われますが、辞書で見るとどうでしょうか。「生きる力、生活力」を大切にということでしょうか。なんとなく不具合な気がします。あるいは二つ目の「生まれてから死ぬまでの寿命」を大切にということなのでしょうか。これもちょっと馴染めないですね。それでは、三つ目の「人生、生涯、一生」を大切にということでしょうか。どうも当てはまらないような気がいたします。それでは最後の四つ目の「一番大事なもの」を大切にというのも、なんだか少しそぐわないです。そうすると「いのちを大切に」という言葉は、「いのち」という現代語からは出てこないわけです。そうするとどこから出てくるのでしょうか。「生命の尊重」とか、「生命の尊厳」という言葉は辞書に出てきます。「生命」というのは生物的存在、肉体のことです。私たちの体は様々な元素に還元される物質によって成り立っています。その様々な元素によって成り立たしめられている在り方を「生命」というわけですから、物質としての「いのち」ということです。そうすると「いのちを大切に」といった場合は、「生命を大切に」ということになります。どういうことかと言いますと、最近は、親が子どもを殺したり、子どもが親を殺したり、気に食わないからと言って何の理由もなく人を殺したり、という現実があります。そういう現代社会の中で、人の体を殺したり、傷つけたりしてはいけませんという意味で、「いのちを大切

に」という言葉が使われているのかなあと思ったりしています。

とにかく、仏教において「いのち」というのは、生まれて、歳をとり、病気になり、死んでいくという「寿命」のことです。そういう「いのち」を私たちはどのように引き受けていったらよいのか。私たちは歳をとるのが嫌です。病気にかかるのも、死ぬのも嫌です。そういう私の思いがあります。しかし、生まれたら死ぬのは当たり前です。そうならば、そのような「いのち」をどのように引き受けていけばよいのでしょうか。そのことを問い、きちっと教えて下さった方がお釈迦様というお方です。今日の成道会は、そのお釈迦様が私たちの「いのち」をどのように見定められて、お覚りを成し遂げられたのか。そのことを改めて確認する集いということです。

四門出遊

皆さんは授業で習ってよくご存じだと思いますけれども、お釈迦様は、今から二五〇〇年ほど前にインドの地で生まれました。お釈迦様の種族は、シャカ族と呼ばれる小さな種族でした。そのシャカ族の皇太子としてお生まれになりました。ゴータマ・シッダールタというお名前です。そのお城をカピラ城といいます。カピラ城には四つの門があったようです。このお城があった場所は、現在のネパール領でそのシャカ族のカピラ城の遺跡が発掘されています。東の門と西の門は確認されましたが、南の門と北の門はまだどこにあるのかわかりません。四つの門があったからといって、お城が四角いとは限りません。どのような形をしていたのかもわかりません。したがって、まだ南の門と北の門は発見されておりませんけれども、

東の門と西の門は発見されています。お釈迦様は若い時に、「お城の外はどのようになっているのか」と見学に出かけるわけです。お城といいまして、日本のお城のように殿様だけが、大名だけが住んでいるわけではありません。インドの昔のお城というのは、商売をする人たちや、大工さんなどの技術者たち、その他の職業の人たち、いろいろな人たちが住んでいたわけです。農業をする人はお城の外で生活していたでしょうが、それ以外にも、お城の中に入れてもらえない人たちがいました。身分の低い人や奴隷の人たちの多くは、お城の中には入れなかったのです。そういう人たちは、お城の外に住んでいました。お城の中には、生活に恵まれた人たちが住んでいたのです。

お釈迦様は、いつもお城の中で生活していました。それでお城の外はどのような世界なのかと思って、見学に出かけたわけです。そのことが物語として伝えられています。四門出遊の物語といわれています。

まず東の門から出ると、杖をついたよぼよぼのお年寄りに出会うわけです。それでお釈迦様はびっくりします。お釈迦様は「あの者は何者なのか」と、一緒について来た家来に尋ねました。そうすると家来は「あれはお歳をとった方です。王子様も必ずあのような姿になります」というわけです。お釈迦様は驚いて、お城へ引き返して部屋に閉じこもり、もの思いにふけったのです。

次にお釈迦様は、南の門からお城の外へ出ました。すると今度は病気で苦しんでいる人に出会いました。お釈迦様は「あの者は何をしているのか」と家来に尋ねました。すると家来は「あの者は、病気で苦しんでおります」と答えました。お釈迦様は「私もあのようになるのか」と家来に尋ねると、家来は「王子様も時には、あのような苦しみを受けなければなりません」と答えました。するとお釈迦様はまたびっくりして、お城の中に引き返して、もの思いにふけったわけです。

次にお釈迦様は、西の門から外へ出ました。すると、死がいが転がっていてびっくりしてしまいます。

お釈迦様が「私もあのようになるのか」と家来に尋ねると、家来は「王子様も、いずれはあのようになります」と答えました。皆さんは街中に死がいが転がっていたらびっくりしませんか。私は、インドへ行くようになって四十年以上が経ちます。最初に行った頃は、街中に死がいが転がっていてびっくりしたことがあります。親鸞聖人が生きておられた鎌倉時代の京都でも、鴨川には、大飢饉で亡くなった人たちの死がいがたくさん捨てられていたといいます。

現在コルカタと呼ばれているカルカッタという街に行った時、朝方ぶらっと散歩に出かけていましたら、私は人の死がいが転がっているのを見つけました。びっくりしました。日本ではありえないでしょう。それでびっくりしておりましたら、三人ほどの男の人が集まってきました。インドでは、亡くなったらガンジス河などの川岸で、火葬にして骨や灰をすべて川に流してしまいます。お墓というものはありません。体を大地に帰していくのです。そこで男たちは、「道端に転がっている死がいのこの人は、川で火葬にするだけの薪代のない可哀想な人だから、火葬にするお金が欲しい」と私にいうわけです。薪代が欲しいと。「いくら欲しいのか」と尋ねると、日本円で三百円程だというものですから、それに見合うインドのお金をあげました。さて次の日になり、私は散歩がてら昨日の場所に行きました。すると、昨日の死がいがまだ転がっているのです。そして、昨日お金を渡した男たちが、私の姿を覚えていないのか、再び薪代が欲しいと言ってきたのです。つまり、男たちは死がいで商売をしていたのです。ひどい国だなあと思いました。けれども、さすがにインドだなあとも思いました。ですから、今から四十年前でさえ死がいが転がっていたのですから、二五〇〇年前もたぶん、誰も火葬にしてくれることのない生き倒れの人がいたのでしょう。その姿をみてお釈迦様はびっくりされたのです。それでまた、お釈迦様は、お城へと引き返して、もの思いにふけったのです。

次にお釈迦様は、北の門から外へ出ました。すると、そこで沙門に出会ったのです。沙門というのは、インドの言葉でシュラマナという原語を音写した言葉です。意味は、「努力をしている人」という意味です。沙門は何のために努力をしているのかと言いますと、「自分のいのちは何であり、人生をどのように生きたらいいのか」ということを明らかにするために努力しているのです。沙門とは、いろいろな先生方のお話を聞くためにインド中を放浪している遍歴者のことです。その沙門に出会ったお釈迦様は、家来に「あの者は何者か」と尋ねられました。家来は、「あの者は沙門と申します」と答えます。するとお釈迦様は、「あの者の目は何と清らかで澄んでいることだろう」と呟いて、お城へと帰っていかれました。そしてその後、お釈迦様は沙門となって、お城を出ていくわけです。これを出家と申します。目的もなくて家にいるのが嫌だといって出ていくのは家出です。目的があって家を出ていくことを出家と言います。人生の問題を抱えて、それを解決しようとして家を出る人は、家出とはいわないで出家というのです。意味が違います。ともかくも、お釈迦様の伝記には、このような物語があるのです。

いまの物語を聞いて皆さんはどのように思いましたか。ちょっとおかしいなあと思いませんでしたか。お城の中には、お年寄りや病人がいなかったのでしょうか。変ですね。しかし、そのことについては、お釈迦様が部屋から出るときは、お年寄りや病人の姿を見せないように隠したと語られています。家の中に閉じ込めたのでしょうか。この物語は私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。物語ですから、その物語の根底にある意味を探らなければなりませんね。お年寄りや病人の姿を隠したということは、どういうことなのでしょうか。実はこれは、現在の私たちの姿を物語っているわけです。

隠された「生老病死」

最近、テレビをみているとお年寄りを若く見せるお化粧品だとか、健康食品だとか、そのようなコマーシャルばかりじゃないですか。六十歳ぐらいのご年配のご婦人方がテレビに登場して、若返ってうれしいという顔をしているでしょう。いま、私は七十三歳です。やはり私も、「お若いですね」と言われればうれしくなります。私たちはお化粧をしたり、きれいな着物を着たり、なるべく若く見せようと年齢を隠しながら生きています。実際の年齢より老けた格好をしないようにしています。二五〇〇年前のカピラ城の中もそうだったのです。恵まれた人たちばかりでしたから。お化粧をして、いろいろな飾りを身につけて、きれいなサリーを着て、歳をとっているということを隠して、なるべく若く見えるように生活していたわけです。そのことを意味しているのではないでしょうか。そして、病気になったら、すぐにお医者さんが来て治してくれます。死がいが放置されることもなかったでしょう。城の中では死がいは捨てられていませんから、それを目の当たりに見ることはありません。現在もそうですね。私たちは、病気になったらすぐに病院へ行きます。そして、死ぬ時は病院で死んで逝きます。ですから、死を看取ることがなかなかできなくなりました。私が小さい頃、人が亡くなる場合の多くは自宅でした。その亡くなって逝く人をみんなで囲んで、これが死んでいくということかと、死というものを看取っていきました。私も小さい頃に、四歳の妹を急性肺炎で亡くしました。その死んでいく姿を見て、悲しいというかなんというか、あわれというか、どんなに助けようとしても、どうにもならない妹の死というものを自宅で看取りました。けれども現在はほとんどが病院で亡くなりますね。死というものが生活の場から隠されています。そういう意味で、「人間が死んでいくということがどういうことなのか」ということを、生活体験として看取ることが

できないようになってしまいました。そのような現代と同じことが、二五〇〇年前のインドの城の中でも行われていたのではないかと思います。ところがお釈迦様は、城の外へ出てびっくりしたわけです。お化粧などもできないでいる、着飾ることもできないでいる、お年寄りそのものの姿を見たのですから。

また、病気になり苦しんでいる人の姿を見たわけです。薬草などはあるかもしれませんが、お城の外にはお医者さんなどいませんでした。さらに、お城の中ではほとんど見ることのなかった死がいを見たわけです。その時に、お釈迦様は「はっ」と気付かれるわけです。「生まれて、歳をとり、病気をして、死んでいくということは、こういうことなのだ」と。お城の中にいる人たちが、お化粧をして歳を誤魔化していても、必ず歳をとっていくということ。どれだけ病気を治しても、必ず死んでいかなければならないということ。お城の中では隠されていたことが、お城の外では、自然な生老病死そのままがあったわけです。そのことにお釈迦様は、びっくりされたわけです。

出家の動機と苦行生活

私たちはどうですか。自分が歳をとって、病気になり、死んでいくことは嫌ですね。しかし、お年寄りを遠ざけていませんか。病気の人を遠ざけていませんか。そして、死人を汚いといって遠ざけていないでしょうか。若さを謳歌しながら、お年寄りを粗末にしている。健康を謳歌しながら病気の人を遠ざけている。生きることを謳歌しながら死んで行く人を遠ざけている。そういう自分の生き方に、お釈迦様はやり切れない思いを抱かれたわけです。自分自身が歳をとり、病気になり、死んでいくことが嫌なだけではな

く、歳をとっている人、病気になっている人、死んでいこうとしている人を忌み嫌って遠ざけて生きてきている。どれほど若さを謳歌しても必ず年老いていく。どれほど健康を謳歌しても病気になる。どれほど生を謳歌しても必ず死んでいく。そういう私の「いのち」とは、いったい何なのだろうか。そこから仏教は始まったのです。

生まれて、歳をとり、病気になって、死んでいく、この私の「いのち」とは、一体何であるのか。それを解決するために、お釈迦様は出家されました。そして、お釈迦様は六年間の苦行をするわけです。苦行というのは、飲まず食わずで過ごし、やせ衰えて、あばら骨も血管も浮き出てくるほどの修行をすることです。そのような苦行を何のためにされたのでしょうか。

皆さんは、ガンダーラ仏教美術というものをご存知ですか。インドでは、お釈迦様の仏教遺跡がきれいに整備されまして、日本の仏教徒や世界の仏教徒や、それから観光客など、多くの人たちがインドへ行くようになりました。それで観光税といいまして、ドルがどんどんインドに入り大変儲かったわけです。ですから、現在のインドの仏教遺跡は公園のように年々きれいになっています。なぜかといったら観光税がたくさん入るからです。私たちはかつて、「インドの仏教遺跡をきれいにしたら、日本の仏教徒はお参りに来てくれるだろうか」という質問を受けました。そこで私たちは、「間違いなく日本の仏教徒は、インドにお参りに行くだろう」と答えました。それは、インディラ・ガンディーさんがインドの首相をしていた時のことです。そこで、インディラ・ガンディーさんは、インドの仏教遺跡をきれいにし整備したわけです。彼女は首相在任中に暗殺されてしまいますけれども、とにかくインディラ・ガンディーさんの時に仏教遺跡の整備が始まりました。整備が始まった後は、日本からたくさんの仏教徒がインドへと足を運びましたから、インドにはどんどんお金が入りました。それを横目で見ていたパキスタンが、今度は私たち

に来てくれと言ってきたのです。「パキスタンにある仏教遺跡をきれいに整備したら、日本の仏教徒は来てくれるだろうか」と、それを調べてほしいというわけです。そして、私たちはパキスタンへと向かいました。しかし、ご存知のようにパキスタンはイスラムの国です。ですから、仏教遺跡は徹底的に破壊されていました。ほとんど残っていません。けれども、そこにあった昔の仏像は、各地方の博物館に保存されていました。それがガンダーラ仏教美術と言われているものです。その中に、お釈迦様が苦行しているお姿の苦行像が数多くあったのです。それを見て私はびっくりしました。それから二十日間ほどパキスタンの仏教遺跡を調べてレポートを書きました。「日本の仏教徒を引きつけることはできないでしょう」と。そして、「パキスタンの仏教遺跡がこれほど徹底的に破壊されていれば、かえって逆効果になるだろう」と。「日本の仏教徒の心を引き付けることはありません。しかし、このガンダーラの仏教美術は、ものすごく素晴らしいから、この仏像を日本で展観したら成功は間違いないでしょう。」とレポートしました。それが八月のことでした。次の年の三月に、大阪でガンダーラ仏教美術展が開催されました。ものすごい人気でした。そして会場の中央に、お釈迦様の苦行像の中で最も芸術的に優れた、出来のいい彫刻が展示されました。このことがあってから、しばらくの間は、ガンダーラ仏教美術というものが話題となり、そのブームが続きました。ともかくも、これから皆さんがガンダーラ仏教美術の写真集などを見たら、必ずお釈迦様の苦行像を目にすることになると思います。現在では、この苦行像は、パキスタンから国外に持ち出すことはできなく、門外不出となっています。

　それほどになるまで、お釈迦様はなぜ苦行をされたのでしょうか。皆さんにお尋ねしますけれども、皆さんは、「私が生きている」と考えておりませんか。「私が死ぬ」と思っておりませんか。どうですか。そんなことは当たり前だろうと思われるでしょう。「私が生きている」のだから「私が歳をとっていく」と、

「私が病気をする」と、「私が死ぬ」と思っていますね。しかし、お釈迦様はその「私」とはいったい何者なのかということを徹底的に命がけで追求されたのです。それが苦行だったのです。皆さんは、そのようなことを考えたことはありますか。

私とは何者なのか

この「私」とは一体何者なのかということを、ヨーロッパの哲学者でいいますと、十七世紀にデカルトというフランスの哲学者が、『方法序説』という書物の中で説明しています。私たちの高校生の頃には、デカルトの『方法序説』を読んでいないと友だちと話ができませんでした。あるいは、西田幾多郎の『善の研究』とか、マルクスの『資本論』などを、わからないなりに読んでおかないと、友だちと人生について語ることができませんでした。いまはちょっと時代が違いますね。皆さん方の間では漫画の本を読んでいないと話が通じないでしょう。時代が変わったものだなあと思います。私は漫画が悪いと言っているわけではありません。漫画の中には、素晴らしくレベルの高いものもあります。文字よりも絵で伝えた方が伝わりやすいこともたくさんあります。ですから漫画が悪いと言っているわけではありません。ともかくも、私たちの頃は、このデカルトの『方法序説』を読んでいないと話ができなかったのです。その『方法序説』の中に、このようなことが書いてあります。「世の中のすべてのものを疑うことはできるが、疑っている自分だけは疑うことはできない。」と。そのことを表現したのが「我思う、故に我あり」という有名な言葉なのです。これは哲学の世界では「自我の発見」といわれる大変な出来事だったわけです。「私

は、私は」と言っているその「私」とは、どのような存在なのかといったら、デカルトは、すべてのものを疑うことはできるが、疑っている「私」の存在だけは疑うことはできないのであるから、「私」は存在するということで、それを「私」の存在証明にしようとしたわけです。それをもって、この「私」というもの、欧米の言葉で表現するならば「エゴ」というものは存在すると想定したのです。そのようにして「エゴ」が発見されたのが十七世紀頃なわけです。それが現在でも、欧米の哲学の基本となっているわけです。

ところが、お釈迦様は、いまから二五〇〇年も前に「私」とは何者かということを追求したわけです。そのために苦行をし、苦行を続けて死ぬ寸前までいったときに、この「私」というものが、つまり「エゴ」がちゃんとした存在であるならば、肉体が死ぬ寸前にまでいったら「私」というエゴが肉体を超えて輝き出るはずだ、と考えられたのです。ところが、苦行をしてもう死ぬ寸前までいった時に、お釈迦様は、「意識はもうろうとしてしまい、私が生きているだとか、私が死ぬのだとかいう、そのように思うことなどがすべて吹っ飛んでしまった」とおっしゃっておられるのです。もう何も考えることが、できなくなってしまったというわけです。「私」というものが確かな存在として存在しているのならば、肉体が苦しめられて死ぬ寸前までいったら、そのとき「私」は輝き出るはずなのに、そうではなかったということです。それでお釈迦様は、「はっ」と気がついたのです。この「私」は、肉体と無関係には存在していないのだ。肉体が衰弱したならば、「私」などは吹っ飛んでしまうのだと。その程度の「私」でしかなかったと気付かれたのです。肉体とは別に単独で存在しているような「私」などは、存在していないということを苦行によって確かめたわけです。これは自分の命をかけた実験であったわけです。デカルトは机の上で考えただけなのです。それも十七世紀ですよ。お釈迦様よりも二二〇〇年も後の話です。デカルトよりも二二〇〇

年も前にお釈迦様は、命をかけて、「私」とは何者かということを実験的に追求したのです。そうして、「私」は単独には存在しなかったということに、「はっ」と気がついたのです。この肉体を離れて「私」というものは存在しないと。そこでお釈迦様は、苦行を続けることは無駄であると苦行を捨てたのです。そうして、お覚りを開かれるのです。それを記念しているのが今日の成道会なのです。

因縁という「いのち」への目覚め

それでは、「私」はいないのに、いまここで話をしている私は、一体何者なのでしょうか。そのとき、お釈迦様は、数限りない因縁が私を作っているだけなのだと目覚めたのです。つまり、「私が生きている」のではなく、様々な因縁によって「生かされている私」であったと、気が付かれたのです。難しいことではないでしょう。

今年はオバマ大統領がノーベル平和賞をもらいました。これはいかがなものかと思いますが、昨年の暮れには、日本の四人の科学者が化学賞と物理学賞の部門でノーベル賞をもらいましたね。すばらしいことですね。しかし、どのような研究成果によって受賞されたかわかりますか。私には、どれほどその中身について説明されてもわかりません。わかったら私もノーベル賞がもらえるのでしょう。どれだけ説明されてもわからないですね。意味不明です。お釈迦様は、そのような普通の人には難解なことを覚ったわけではないのです。仏様とは、「目覚めた人」という意味です。目覚めたということは、あっそうだったのかと気が付いたということなのです。「私が生きている」と思っていたけれども、無数の因縁が、私となっ

て「生かされている私」であったと、そういう「いのち」への見定めを持ったということです。これが成道ということの中身です。これが覚りを成し遂げたという意味です。そのような目覚めというものを基本としているのが仏教です。ですから、難しいことを覚ったわけではないのです。だからこそ仏教は、世界の宗教になったのです。難しい教えだったら世界の仏教になりません。

しかし、お釈迦様の説法を聞いても納得できないで立ち去った人もいました。お釈迦様の言う通りではない。「私」は存在しているのだ、「私」がいて「私が生きている」のだと。インドでは、この「私」がいて、一生懸命にまじめに生きて善い事をたくさんすれば、死んだ後には、もっと幸せな世界に生まれることができるのであるという考え方が常識になっていたからです。そのためには、この「私」というものが存在していなければ、それを実現できないではないか、と。そのように考えて、お釈迦様の説法を聞いても納得しないで立ち去った人もたくさんいたわけです。けれども、お釈迦様のご説法を聞いて、「私が生きている」のではなくて、無量の因縁によって「生かされている私」であったなあと頭の下がった人が仏教徒になっていったわけです。いま皆さんは仏教徒になれましたか。お釈迦様と同じ覚りを持ったならば、仏様と同じになったのですよ。簡単でしょう。しかし、どうも納得できないなあと思っている人は、まだ仏様とおなじではないわけです。

このことをもう少し具体的にいいますと、私たちの「いのち」というものはどうでしょうか。私たちの「いのち」が地球上に登場してから、四十億年が経つそうですね。そうすると、私の只今の「いのち」は、四十億年の歴史を受け継いでいるのですね。これは誰でもわかりますね。突然私が生まれたわけではありません。私の「いのち」の根源をずっと探っていったら、四十億年前まで遡ってしまうわけです。その四十億年の「いのち」の歴史の中で今の私がいるわけでしょう。四十億年というと言葉では簡単に言うけ

れども、想像はできませんね。その歴史の中で何か一つでも条件が変わっていたら、いまの私の「いのち」はありません。

少し前に遺伝子のことが話題になりましたね。私たち人間とチンパンジーの遺伝子は、ちょっとしか違わないそうですね。遺伝子の九十五パーセントは無能で役に立たないそうです。何の働きもしていません。残りの五パーセントの遺伝子のちょっとした違いで人間に生まれたり、チンパンジーに生まれたりするそうですね。そうすると私の長い四十億年の歴史の中で、ちょっとでも条件が変わっていたら、チンパンジーになっていたかも知れない。不思議ですね。本当に不思議な「いのち」を生きているわけです。

それに私たちは毎日、様々な生き物の命を殺して食べて生きているでしょう。長く生きれば生きるほど、多くの命を殺して生きていかなければならないのです。悲しいですね。お釈迦様はこのようなことを言っています。「暴力を恐れ、死を遠ざけて生きているわが身に引き比べて、殺してはならぬ、殺さしめてはならぬ。」（法句経）とおっしゃっています。厳しいですね。生き物を殺したり、誰かの手を借りて殺さしめて、生き物を食べている私たちですから、「そうしてはならぬ」といわれたら、あまり長くは生きられませんね。死ぬしかありません。しかし、私たちは生きていたいのです。だからといってお釈迦様は、「あなた方よ、早く死になさい」と言っているわけではありません。「多くの生き物を殺して、殺さしめて身を養っている。だから、私の一瞬一瞬の「いのち」は、限りない命の悲しみの上に成り立っているのですよ。そのことを忘れてはいけません。」とおっしゃっているのです。命を奪われていった生き物たちの悲しみの上に、今の自分たちの「いのち」があるのだ。そのことを忘れてはいけません。そのことを忘れるようでは、人間ではありません、と言っているわけです。

皆さんはお食事のときに「いただきます」と言って合掌していますか。できればお食事をする前には

「いただきます」ということを言ってほしいと思います。「いただきます」と言って手を合わす。そこに命の悲しみが伝わってきます。魚の姿を見ながら、なんとなく悲しみが湧いてきますよ。お食事の時に「いただきます」ということを言うことで、命への涙が湧き、悲しみの涙が出てきます。それが私たちの「いのち」を潤していくのです。そのことを疎かにして生きているのが私たちではないでしょうか。そのために、渇いた殺人などの犯罪が起こっているのではないでしょうか。命への悲しみを失ったからです。このことが根源的な理由なのではないでしょうか。皆さん方が毎日の日暮らしの中で「いただきます」と言ってお食事をすることで、渇いた「いのち」に自然と悲しみの涙がしみ込んで、渇きが取れてくるのです。潤ってくるのです。理屈ではありません。そのような命への悲しみに対して流した涙によって私たちの「いのち」は潤ってくる。そうすると渇いた殺人などは、起こってこなくなるのではないでしょうか。

ある大学生とのエピソード

私が昔、大谷大学で学生部長をしていた時に、このようなことがありました。哲学科の男子学生が私の部長室へ朝早くやってきて、「私は死にます」と言うのですね。自殺しますというわけです。私は、びっくりしました。「どうしたの」と尋ねると、男子学生はこのように答えました。「私はまじめな学生のつもりです。卒業したらそれなりの就職ができるでしょう。そして、妻にも恵まれるでしょう。そして、一生懸命に頑張れば課長にも部長にもなれるでしょう。しかし先生、五十年もすれば私は死ぬのですよね。そのようなことは結局は虚しいじゃないですか。」このように言うのです。そこで私も「そうだなあ、すべ

ては虚しいよな」と答えました。すると男子学生は、「それなのに先生はなぜ生きているのですか」と詰問してきました。それで私は答えました。「その通りだ。君が言ったようなことは、すべてが虚しく終わっていく。しかし、君にはお父さんお母さんはいるのか。」と尋ねますと、「はい、元気にしています。」と言うので、「君が自殺をしたら、君のお父さんお母さんはどれほど悲しむだろうか。どれだけ悲しみの涙を流すだろうか。そのことを考えたことがあるか。」と。すると、男子学生は「考えたことはない」と答え、しばらくして涙を流し始めました。「自分が死んだら涙を流してくれる人がいる」ということに気が付いたのです。それで、その学生は「わかりました。ありがとうございました」と言って帰って行きました。「わかりました」ということは、どういうようにわかったのか。私としては、その男子学生がどのようにわかったのかがわからないわけです。ですから、私は電話が鳴るたびにどきっとして「もしかしたら自殺したのではないか」と不安でした。そして、一週間ほど経って大学の構内でばったりとその男子学生と出会いました。すると、その学生は、にこにこと笑って、「先生、死ぬのをやめました」と言ってくれたのです。

自分の「いのち」のために涙を流してくれる人がいる。それは「いのち」が失われることへの悲しみの涙なのです。私たちも、自分の身を養うために、多くの命が奪われている、そのことへの悲しみの涙を流すことへの目覚めを持って生きることが、人間であるということです。そのことをお釈迦様はおっしゃったわけです。そうすると私たちの「いのち」は、四十億年の命の歴史の中で毎日のようにいろいろな命を奪いながら成り立っているわけです。しかし、それだけで私たちの「いのち」は成り立っているのでしょうか。違いますね。それは肉体だけの話にすぎません。それ以外に形のないご縁が、いっぱいあるわけです。

親への感謝の気付き

私は図らずもお寺に生まれました。自分で選んだわけではありません。しかし、お寺に生まれるというご縁がなかったならば、いまの私は無かったことは確かです。大谷大学という大学に入りました。これもお寺に生まれたからです。私の郷里は北海道です。いまでこそ、私の通っていた高校は、進学校になって有名になりましたが、私の学生のころは、学生生活を楽しみ、受験勉強で苦しむこともなかったし、塾もなかった。年に二回ほど模擬試験があったぐらいで、勉強などはほとんどしていませでした。私の三年生の時の担任の先生が、君ぐらいの実力があったら東大でも、京大でも、よっぽど失敗しない限り、合格できるよと言われました。それで家に帰って、父親にそのことを話しました。それで私は、東京があまり好きではありませんでしたから、京都の京都大学に行きたいと話したら、父親がこう言いました。「京都大学には行く必要はない、お前は大谷大学へ行くのだ」と言われました。私はびっくりしました。私は父親が喜んでくれると思っていましたから。高校の先生は私の才能を認めてくれているのに、父親は私の人生をなんと考えているのだろうか。なんという酷い親父だと恨みました。しかも、大谷大学へ行くのなら学費を出してやろう。他の大学に行くのなら学費は出さないと言われたのです。ですから私は、泣く泣く大谷大学へ入学しました。誰でもが入れる大学なんてつまらないと思っていました。しかし、泣く泣く進んだ大谷大学で、私はすばらしい先生に出遇ったわけです。その先生は、世界的な仏教学者で、山口益という先生でした。そこで初めて、本当の仏教に出遇い、それを学び始めました。それがなかったら、いまの私はありません。思えば、大谷大学に入って仏教というものを学び始めて、仏教に出遇って、初めて本当の親父に出遇ったとも言えます。それまでの親父というのは、生物的に私を生んで育ててくれた親父で

あった。大谷大学で仏教を学んで、仏教にたいする父親の信念と言いますか、かつて恨んでいた父親だったけれども、ちゃんとこうなることがわかっていてくれたんだと思いました。その時に初めて私は、父親というものに本当に出遇ったのです。ですから私は、その大学で出遇った先生と父親を人生のかけがえのない恩人として尊敬して止みません。大谷大学へ行けと言ってくれた父親がいなかったら、いまの私はありません。しかも、そこで山口先生に出会わなかったら、いまの私はありません。

形にあらわれない無数のご縁

そのような形に現れ出ない、いろいろなご縁が、今ここで、話をさせてくださっているわけです。私が話をしているのではないのですよ。七十三年間私をお作りくださった因縁が、勝手にしゃべっているのです。次に何を話そうかなどとは、考えておりません。口からどんどん出てくるのです。今日まで私を作ってくださったご縁が、言葉となって口から出てくるのです。しかし、いまここで、私が話をしているということは、それだけでしょうか。私を作ってくださったご縁だけでしょうか。それだけではないのです。私の話を聴いてくださっている皆さんがおられるからでしょう。私がここで話をしているというこの一瞬一瞬が私なのです。これ以外の私はいないのですよ。私がいま話をしているというこの瞬間しか、私は生きていません。そしていま、話をさせていただいているこの瞬間をお作りくださっているのは、皆さん方でしょう。聴いてくださっている皆さんがおられるからでしょう。中には眠っておられる方もおられますが、それも仕方のない事なのです。ご縁のままですから。いま私の話をお聴きくださっている皆さんがお

られるから、話している私が成り立っているのです。逆に、皆さんもそこに座って私の話をお聴きくださっています。なぜでしょうか。私が話をしているからでしょう。今日、講師の小川がいま流行の新型インフルエンザにかかって、ここに来れなくなっていたらどうでしょうか。大学の先生の誰かが代わってお話をされているかも知れません。そうすると状況は変わりますね。しかしいまは、皆さんが私の話を聴いてくださっているというあり方でしか、この現在の一瞬はあり得ていないわけです。そうすると、皆さんを只今の皆さんたらしめているのが私です。また、この私を私らしめてくださっているのは皆さんです。「いのち」はすべて、その瞬間において関係し合っているのです。私も皆さんも、単独で存在しているのではないのです。しかも、この瞬間しか生きていません。この瞬間の私の「いのち」をお作りくださっているのは皆さんです。そして、皆さんの只今の「いのち」を作っているのは、この私です。そういう関係性の上において、私の「いのち」も、皆さんの「いのち」も成り立っているのです。そのことを明らかにしてくださったのが、お釈迦様の「いのち」に対する見定めなのです。わかったような、わからないような顔をされている方がおりますから、もう一つ喩えをあげてみたいと思います。

親と子の関係

今から一八〇〇年ほど前のインドのお方で、お釈迦様の教えを受け継いだ龍樹という方がおられます。インド語ではナーガールジュナという方です。その龍樹は、こういうことをおっしゃっておられます。「世間では親から子どもが生まれると言うけれども、それは間違いじゃないだろうか。」と。皆さん驚きま

せんか。親から子どもが生まれるのは、当たり前だと思っているでしょう。親がいなければ子どもは生まれませんよね。龍樹は続けて言います。「親から子どもが生まれると言うけれども、もしそうならば、子どもが生まれる前に親がいることになる。しかし、この世の中に子どものいない親がいるだろうか。」と。そうですね。子どもがいなければ親とは呼ばれないですよね。だから一般的には親から子どもが生まれるというけれども、子どもが生まれて親となるのですから、子どもから親が生まれるということにもなります。このように説明されたら簡単な話でしょう。子どもが生まれて初めて、お父さんお母さんと呼ばれる身になったわけでしょう。そうすると子どもに恵まれたことによって、親になれたという子どもに対する深い感激と喜びがあるのではないでしょうか。ですから、親を親にするのは子どもなのです。子どもが親の因になるのです。もとより、子どもは親から生まれますから、親は子どもの因です。お互いがお互いを成り立たしめているわけです。どちらが先でどちらが後ということではないのです。関係性の中で親は親たり得るし、子どもは子どもたり得ているのです。そうだとしたらどうでしょうか。親は親の責任があります。ですから、子どもである皆さんにいろいろなことを言うけれども、心の中では、「あなたのお陰で親となりました。ありがとう」と思っているはずなのです。そういう思いを抱いているお父さんお母さんのもとでは、子どもも親に叱られながら腹の立つこともあるだろうけれども、反抗することもあるだろうけれども、「このお父さんお母さんのお陰なのだなあ」という思いが湧き出てくるのです。そのような関係性がいまの日本は、見失なわれてしまっているのではないでしょうか。

私たちは結婚披露宴などで、「子どもさんを何人作りますか」というような質問をしたりする場合に出会うことがあるでしょう。子どもを作ると言う場合、それは子どもは物になってしまっているのです。私が子供の頃には、「子どもを作る」などという言葉はありませんでした。子どもは授かったもの、恵まれ

たもの、いただきものということでした。子どもを作るという言葉が流行りだしたのは、昭和三十年代になって、一九五五年以降になってからです。経済的な高度成長が始まってテレビが出始めた頃から、「子どもを作る」という言葉が、盛んにテレビから飛び出して、それが常識となりました。いまでもそうですね。私は「子どもを作る」という言葉を初めて聞いたときに、ものすごくショックを受けました。子どもを作るとなると、私があなたを作ってあげたのだから、私の言うとおりにしなさいということになるわけですね。そういう発想が出てきます。親の思いを子どもに押しつけてしまいますね。子どもは反抗します。皆さんには汚い言葉に聞こえるかもしれませんが、子どもが作られるということになりますと、子どもから言わせれば、いつ作ってくれと頼んだのかということになるわけです。そこで親子の間に断絶が入ります。もっとも大切な親子関係の根底が失われてしまっているのです。「あなたが生まれてくれたお陰で、私は親となることができました」という子どもへの感謝が失われているのです。そして、子どもを自分の思い通りの子どもに仕立て上げようとするわけです。それが子どもにたいする愛情だと勝手に決め込んでいるわけです。そのような時代がずっと続いてきました。最近はどうでしょうか。皆さんの親子関係はどうでしょうか。

まとめ

いま、親子の喩えで話をさせていただきましたが、私たちはいろいろな関係性の上で、只今の「いのち」を生かせていただいているのです。ですから、いまは私と皆さんとの関係性の上で私も成り立ち、皆さん

も成り立っているのです。そして、皆さんもお友達同士とか、この大学へ来たということについてはいろいろなご縁があるわけで、いろんなご縁に恵まれて、この大学で学んでいるわけです。そのご縁の中で、さらに皆さんお一人お一人の関係の中での出会いがあるわけでしょう。一人で単独に生きているということはあり得ないのであって、私にとって都合のいい事であっても都合の悪い事であっても、そういう出会いの中で、つながりの中でお互いがお互いに成り立たしめられている「いのち」であるということです。

「私が生きている」わけでもなく、「私が死ぬ」わけでもないのです。様々な因縁のままに「生かされている私」であったと目覚めさせられたとき、私たちは、「生かさるる、いのち尊し」という感動と感謝の気持を持って、一瞬一瞬を力強く自分の「いのち」を引き受けて生きる者となることができるのです。そういう「いのち」への目覚めが、『仏教から見た「いのち」』ということになるのではないかと思います。

十分な話ができませんでしたけれども、今日の話で何かしら皆さんの頭の中に残るものがありましたら、そのことについてお一人お一人が考えていただきたいと思います。それでは、これで私の話は終わりにさせていただきます。最後までお付き合いくださいましてありがとうございました。

（付記）

本稿は、平成二十一年十二月十五日、本学「成道会の集い」でのご講演に加筆修正いただいたものです。